

# 中国青島市大学路一帯における近代郊外住宅の建設活動と住民層

## CONSTRUCTION ACTIVITIES AND RESIDENTS OF MODERN SUBURBAN HOUSES IN DAXUE ROAD AREA, QINGDAO, CHINA

徐 暢<sup>\*1</sup>, 藤川 昌樹<sup>\*2</sup>  
*Chang XU and Masaki FUJIKAWA*

This article illustrates the development of residential construction on the Daxue Road area in the suburb of modern Qingdao. This area changed from the private living space of education stakeholders during the first Japanese occupation to a cultural living space enhanced by the elites during the G.R.C. period. The housing styles also changed from the school apartments to independent private houses, especially duplex houses. In the second Japanese occupation period, the multiple dwelling houses developed by individuals appeared, and the residents became miscellaneous. It enriched the types of housing and residents in modern Qingdao.

**Keywords:** Urban Construction Archives, Duplex House, Koyama Yoshiki, Guangshatang, Wang Xinchun, Upper Classes

城市建设档案, 上下二戸一住宅, 小山良樹, 広厦堂, 王心純, 上流階層

### 1. はじめに

近代中国には、租界地、租借地などの外国の支配を受けた都市が数多く存在していた。これらの都市では都市の規模拡大とともに、新興住宅地が建設され、各国の文化に影響された多様で新しい住宅が生まれた。上海や天津などの複数国による租界が旧市街に部分的に付加された都市とは違い、本稿で取り上げる近代の青島には最初はいくつかの漁村があるに過ぎなかった。後にドイツの租借地になり、はじめて近代的な都市計画が全体にわたって施された。そして、1898年～1949年の間にドイツ、日本、中国の三ヶ国が単一の統治主体として交代に統治したため、各国による統一的な計画及び建設が行われる一方、各国のそれぞれの時点の住文化が混りあい蓄積されるという独特な様相を呈した。青島市は1994年に第三陣の「国家歴史文化名城」に指定されているように歴史的な都市とみなされており、その魅力は昔から「紅瓦緑樹、碧海藍天」という言葉で世間に評価されている<sup>注1)</sup>。その内の「紅瓦」はドイツ租借地時代に建てられた住宅をはじめとする、近代建築物のことを指している。だが、ドイツ時代のものだけでなく、青島には、他の近代都市にはあまりない里院などの住宅形式が存在することを評価するべきであると考えられる<sup>注2)</sup>。

本稿は近代中国の青島市郊外で、社会の如何なる階層の人々が時代ごとに如何なる種類の住宅を建設したか、またそこには如何なる人々が居住したかを解明するものである。研究対象に取り上げるのは大学路沿いの地区である。

大学路一帯はドイツ統治時代の中心市街地のすぐ外側に位置し、北洋・国民政府統治時代には中学校や大学キャンパスの近隣に位置することになった。そして、国民政府統治時代には独立住宅を始め

とした住宅が建設され始め、西洋風の比較的高級な住宅景観が形成された。第二次日本占領時期には「保甲制度」に基づく住民共同体「甲」が大学路に沿って設置されており、一定のまとまりを持った地区だと言える。

当地区を対象として選んだのは、「城市建设档案」(後述)により、当地区ほぼ全体の住宅に関し、本格的な建設の開始から建設後の変化までの過程がわかること、また、大学路沿いに建設された住宅が現在も良く残っており、地域の歴史的資源になっているとともに、「城市建设档案」の信憑性が確認できることによる。

青島の近代住宅を対象とした論文は数多くある。その中では、歴史的建造物の保存と再利用に関するものが主要であったが、住宅地の形成と変容について特に優れた研究として以下の五つをあげることができる。陳(2006)はドイツ租借時代に現れた公共建築、商工業建築、住宅(特に合院式住宅)などの建築意匠を分析し、華洋融合がドイツ租借時代の建築の特徴であると主張した<sup>注3)</sup>。T. Warner(2011)もドイツ租借時代の都市計画と制度政策を踏まえつつ、ドイツ人と中国人の関係という視点から、主に都市全体の建設実態及び当時の人々の青島に対する印象を解明する一方、個人の建築活動(特に旧清代官僚による農村別荘)にも触れた<sup>注4)</sup>。郭(2014)は現存の中下流階層向けの集合住宅である里院建築を対象に、46件の「城市建设档案」(後述)の統計的な分析を行ない、これらの住宅に関わる工事年、設計者、規模・平面・立面・構造などの空間構成の特徴を結論として提示した<sup>注5)</sup>。上流階層の居住街区に関しては、裴(2012)が別荘の集積する「特別規定建築地」である八大関地区の研究を行い、2012年までの時点における八大関地区の街路、主要建築の外観の特徴、緑地景観の特徴、一部の設計者・有名な居住者の略歴を紹介

\*1 筑波大学大学院システム情報工学研究科博士後期課程

\*2 筑波大学社会工学域 教授・博士(工学)

Graduate School of S.I.E., Univ. of Tsukuba

Prof., Inst. of P.P.S., Univ. of Tsukuba, Dr.Eng.

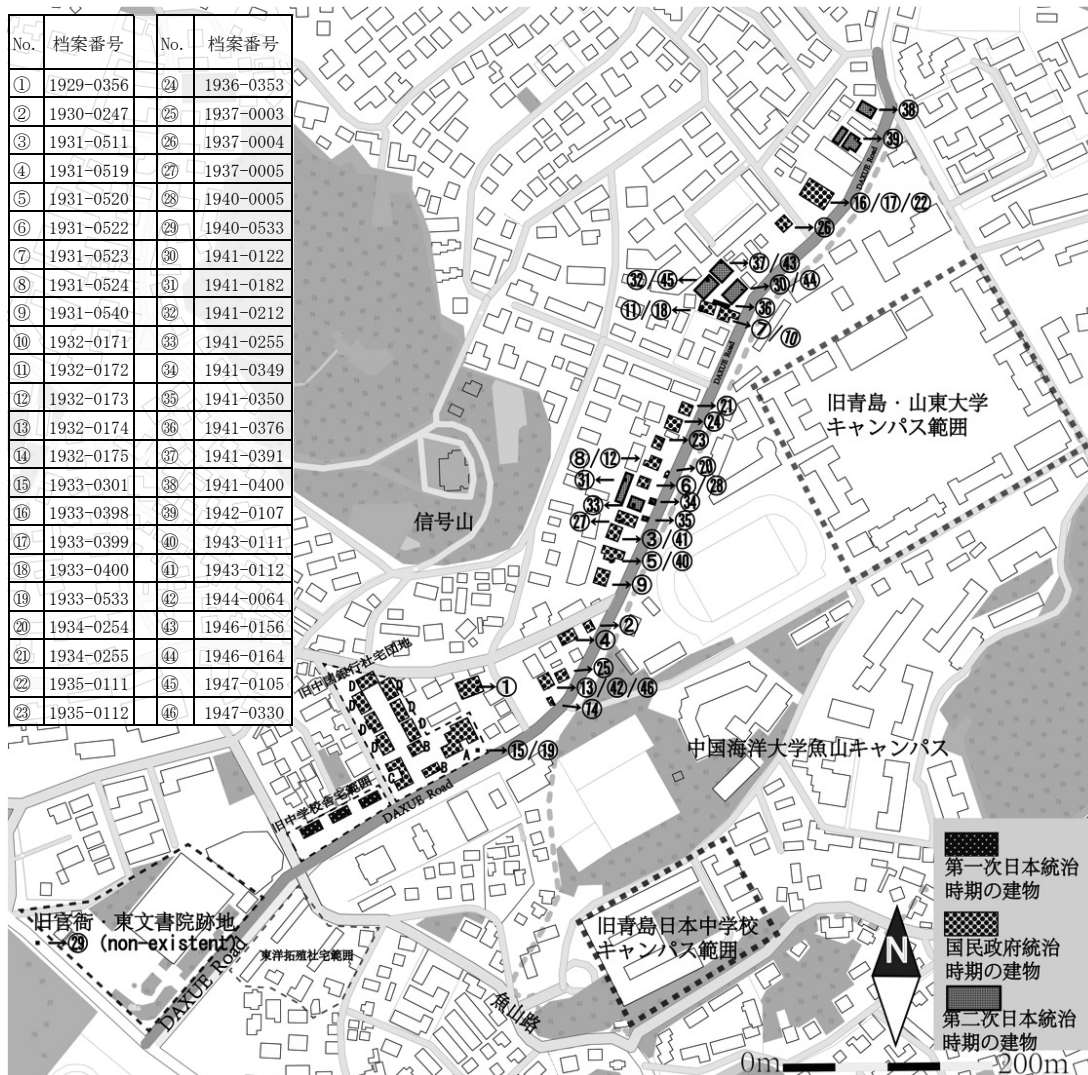


Fig.1 A map shows the relationships between archives and existing buildings (Made by OpenStreetMap)

介し、その保護理念を述べている<sup>注6)</sup>。金(2016)は1922～1937年の間に青島で建てられた住宅を里院、花園洋房、アパートに分類し、档案に基づいて、それぞれの時代背景及び設計者のプロフィールと結び付け、建物の様式と設計意図について詳しく述べたが、個別の建物の理解に留まっている<sup>注7)</sup>。したがって、本稿のように大学路が教育機関と近接するという地区の性格に注目し、時代及び社会背景と結びつけつつ、開発者・建築様式・居住者の三つの側面から、郊外住宅地の建設活動の実態を解明する作業には独自性があると考えられる。

本稿の主史料は青島市都市建設档案馆に所蔵される「城市建设档案」<sup>注8)</sup>(以下、档案)のうち大学路沿いに関わる46件<sup>注9)</sup>、そして、1922年、1938年、1944年の地籍図及びそれに準ずる地図である。档案は建物の新築及び増改築に際して、工事の申請者が行政に申請及び工事後に報告する文書等の綴りである。档案は主に工事申請書、工事説明書、設計図で構成されており、一部の档案には土地権利確認書などの書類も添付されている。これらの档案を用い、住宅の開発者と建築様式を分析する。以下では46件の档案を申請年月順に番号(国民政府時代①～②7、第二次日本占領時代②8～④2、戦後～中華人民共和国成立まで④3～④6)を付けると共に、地番図の情報と現

地確認を踏まえてそれらの所在をFig.1のようにまとめた。この作業の結果②9以外の档案に関わる建物はすべて現存し、大学路の西北側(海洋大学の反対側)に位置していることが判明した。建設は海に近い位置から内陸に移動していったことがわかる。

また、住民層の確認は1930年に日本側が発行した「支那在留邦人人名録」、1936年及び1937年に中国青島公安局が発行した「現住中外重要人員一覧表」、1944年の青島市市南区が発行した「大学路保第五保店舗と及び住民調査票」により行なった。次いで、大学路の建設活動について時期ごとに詳細な説明を行うこととする。

## 2. ドイツ統治時期(1898～1914)

1892年に清政府は膠州湾を防衛するために、当時漁村に過ぎなかった青島地域に官衙、兵営、砲台などを設置した<sup>注10)</sup>。その後、1897年末には、ドイツ軍が青島を占領し、1898年からドイツによる都市計画と建設が行われた<sup>注11)</sup>。

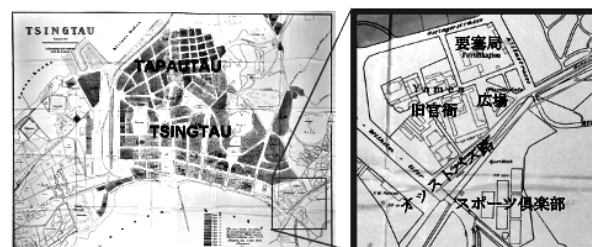


Fig.2 TSINGTAU. Recorded and edited by the Land Office in 1.7.1914<sup>注12)</sup>  
(漢字は筆者加筆)

Fig.2はドイツによる支配の最後の年の1914年の市街地を記録した地図であり、ここにドイツの建設の結果が示されている。当時の青島の中心市街地は北部の大鮑島区中国人街区(TAPAUTAU)と南部



の青島区欧州人街区(TSINGTAU)で構成されていた。図の凡例によると街区の色は濃ければ濃いほど、土地の税金が高かったようである。当時の大学路はオストパス路という名前で、欧州人街区の東側すぐの所に位置していた。大学路の両側には色が塗られていないので、課税対象になっていなかったことが分かる。したがって大学路は当時、市街地としては認められていなかったと考えられる。同図から、当時の大学路周辺には、海の近くに旧清官衙建築、ドイツ占領後に建てられた要塞局、広場、スポーツクラブがあった(太枠内)ことが分かる。これに対し、内陸に入った一帯にはドイツビスマルク兵営の建築しかなかった。この地図には、市域全体の公共施設と他地域の住宅地は描かれている。したがって、大学路だけに住宅が書かれていないのはドイツ統治時期にはこの一帯に住宅が建設されてはなかったからと考えられる。

### 3. 第一次日本統治時期 (1914~1922)

1914年に、日本はドイツに宣戦布告し、ドイツの植民地であった青島を占領した<sup>注13)</sup>。占領後の都市計画に関しては、『青島軍政史』によると、三期にわたる工事で新市街地及び住宅の建設計画は主に旧中心市街地の西側と北側に拡張されたことがわかる<sup>注14)</sup>。

Fig.3は1921年後半から1922年末までに作成されたものと推定されており<sup>注15)</sup>、第一次日本統治時代の市街地建設の成果を反映しているとみることが出来る。大学路の道路名はオストパス路から巽町に改称され、ビスマルク兵営は万年兵営に改称された。しかし、依然として、大学路は以前と同じく郊外であった。そのような状況にあって、大学路周辺では日本人による青島中学校の新築工事が、都市計画に位置づけられた「第二期工事」のうちの一事業として計画されていた<sup>注16)</sup>。こうして青島中学校桜ヶ丘新築校舎の地鎮祭が1920年3月に行われ、1921年6月に落成し、大学路と交差する魚山路にキャンパスの正面入口を設けた<sup>注17)</sup>。



Fig.3 Qingdao Lot Number Map by Minseisho (early 1920's) <sup>注18)</sup>  
(英文施設名は筆者加筆)

大学路一帯における住宅の建設活動は第一次日本統治時期末期から始まったと考えられる。Fig.3の太枠内の内容によると、青島中学校桜ヶ丘校舎は教育棟と学生の寄宿舎で構成されていた。同時に、ほぼ同じ形態の3棟連続の建物が大学路沿いに現れていた。1938年の「最新青島市街一覧図」(博文堂、昭和十三年訂正三十版)には、この敷地に「中学校舎宅」と明確に書き込まれている。青島中学校(のち青島日本中学校)桜ヶ丘校舎は1921年から1945年の日本敗退までずっと存続していたため<sup>注19)</sup>、この3棟はキャンパスとセットで同時に新築され、大学路における最初の住宅となったと考えられる。2019年9月段階でもこの3棟は現存している。Photo1のよ

うに、建物の外観は洋風で、現在では店舗として利用するために激しく改造されているが、内部には押入れのような日本人の暮らし方に合わせた内装の痕跡も残っている。その様式は和洋折衷の特徴を持っていると言えよう。建物は左右対象の四世帯の集合住宅だったと推定される。中学校内には学生寄宿舎があるため、このような独立性の高い集合住宅は中学校の教職員のために用意されたものではないかと考えられる。以上のように、この時期における大学路の住宅は教育機関がその教職員に提供した集合住宅のもので、特定の人すなわち教育関係者たちに専有されるという性格を持っていた。



Photo1 Photos of the Junior High School Houses <sup>注20)</sup>  
(2019.9 by the author)

### 4. 北洋・国民政府統治時期 (1922~1937)

#### 4-1 档案から見た住宅建設の実態と住民層

1922年末の山東懸案の解決に伴い、青島は日本から中国北洋政府に返還され、膠澳商埠に改称された<sup>注21)</sup>。1924年になると私立青島大学が旧ビスマルク・万年兵営の建物を校舎に開学され、青島日本中学校に次いで大学路にある二番目の教育機関になり、1928年まで存続した<sup>注22)</sup>。しかし、この時期の大学路における住宅の建設や住民に関する記述や史料は見られない。1929年4月には中国国民政府が青島を接収した。その直後の档案①の「1929-0356」によると、大商人であった丁敬臣が大学路八番地に平屋と独立住宅を増築しようとしていたが、元の土地権利所有者から引き継いだ敷地内には既に平屋のような建物があつた。したがって、北洋政府時代の頃から大学路には簡単な住宅が少数現れ始めていたと推定される。

1930年9月に国立青島大学が私立青島大学の旧キャンパスを利用して開学した。これに伴い、大学路においても住宅の建設が活発に始められた。

1929年から1937年までの27件(Table1の①~⑳)の档案から見ると、これらの建物はすべて現存しており、主に大学路の旧国立青島大学・山東大学の反対側に信号山を背に建てられた(Fig.1)。27件の内で、完全に新築したものは15件ある。史料原本に「敷地内に増築」と書かれているものは11件ある。この「増築」は敷地内の既存の建物とは別に一棟丸ごと新築したものを意味する。既存建物に接続して、建て増した増築は㉔しかなかった。

Table1に網掛けで表現した欄の新築した住宅は多くが二階建てで、延べ床面積が150㎡以上のものである。地下室(a)と屋根裏部屋(b)が設けられた住宅もある。

住宅類型は独立住宅(8件)と上下二戸一住宅(6件)が主要であった。上下二戸一住宅は、一棟の建物に二世帯が上下の階で独立に生活できる住宅である。上下三戸一住宅は1件のみであった。また、中国銀行行員宿舎の社宅(㉓と㉔)、同郷会の会館(㉕と㉖)も1933年に計画・建設された。居室に便所・厨房付きの平屋長屋も会館敷地

Table1 Information of "Urban Construction Archives" ①～㉔

No.	档案番号	申請者	職業	工事内容 (新增改築・修理)	住宅類型	設計者	营造会社	延べ床面積 (㎡)	部屋の構成*	建築費 (圓)	階 数	建築場 所
①	1929-0356	丁敏臣	商人	住宅 (敷地内の増築)	独立住宅	馬鵬 (CN)	新慎記	739.63	一階：居室2、書斎、便所、食堂、客厅。二階：女僕室、便所・浴室、居室5。三階：居室5、便所。地下一階：ボイラー室。	20000	3+a	八番地
②	1930-0247	韓惜愚	商人	住宅 (新築)	独立住宅	白納徳 (FRA)	徳記営業 公司	165.15	一階：客厅、食堂、居室。二階：物置、居室2、浴室。	4500	2	十二番 地
③	1931-0511	婁邦彦	海軍	住宅 (新築)	上下二戸一	小山良樹 (JPN)	忠興工廠	320.44	一階：居室2、客厅、食堂、厨房、便所・浴室、下房。二階：同一階。	7000	2	十四番 地
④	1931-0519	韓惜愚	商人	住宅 (新築)	独立住宅	陳其信 (CN)	義信成	175.92	一階：客厅、食堂、厨房、下房、便所。二階：居室2、便所・浴室、更衣室。屋根裏：女僕室、物置、不明部屋。	5000	2+b	十二番 地
⑤	1931-0520	婁煥雲	海軍	住宅 (新築)	上下二戸一	王海瀾 (CN)	益順興	249.04	一階：居室、便所、厨房、食堂、給食室、客厅、物置。二階：居室2、便所、厨房、給食室、書斎、物置。	6000	2	十三番 地
⑥	1931-0522	宋以蓮	學界	住宅 (新築)	独立住宅	樂子瑜 (CN)	義和	243.36	一階：客厅、食堂、書斎、便所。二階：居室3、便所・浴室。地下一階：石炭室、物置2、厨房、便所、水室。	5000	2+a	十五番 地
⑦	1931-0523	紀建華	不明	住宅 (新築)	上下二戸一	田有秋 (CN)	永盛棧	166.00	一階：居室、客厅、食堂、厨房、書斎。二階：同一階＋便所。	5000	2	二十番 地
⑧	1931-0524	于墨章	金融	住宅 (新築)	上下二戸一	王屏藩 (CN)	恆徳公記	225.43	二階：下房、便所・浴室、居室、客厅、食堂。一階：同二階＋厨房2、便所。	7000	2	十七番 地
⑨	1931-0540	婁相卿	海軍	住宅 (新築)	上下二戸一	樂子瑜 (CN)	泰徳湧	-	一階：客厅、書斎、居室2、下房、厨房、便所・浴室。二階：同一階。屋根裏：物置。	-	2	黄縣路
⑩	1932-0171	劉亮夫	學界	厨房と壁 (敷地内の増築)	-	王枚生 (CN)	美化营造 廠	20.27	-	1000	1	二十番 地
⑪	1932-0172	薛強初	醫師	住宅 (新築)	独立住宅	劉鈞法 (CN)	東順興	447.77	一階：客厅、食堂、書斎、居室、配膳室、便所2、厨房、下房2、石炭室。二階：居室4、便所・浴室。	9500	2	十九番 地
⑫	1932-0173	于墨章	金融	壁 (敷地内の増築)	-	王屏藩 (CN)	恆徳公記	-	-	250	-	十七番 地
⑬	1932-0174	譚立仁	不明	住宅 (新築)	独立住宅	陳其信 (CN)	祥盛泰	294.40	一階：客厅、食堂、書斎、客室、厨房、下房。二階：居室4、浴室。屋根裏：小屋、物置。	8000	2	十一番 之二地
⑭	1932-0175	譚立仁	不明	汽車房 (敷地内の増築)	-	陳其信 (CN)	祥盛泰	20.00	-	400	1	十一番 之二地
⑮	1933-0301	中国銀行 青島	金融	社宅団地 (新築)	独立住宅 ＋集合住宅	徐垚 (CN)	新慎記	-	Table3に詳述。	190000	-	七、八 番地
⑯	1933-0398	兩湖同郷會	團體	會館 (新築)	-	王枚生 (CN)	協順興	864.00	一階：不明部屋8。二階：不明部屋11。	10000	2	二十四 番地
⑰	1933-0399	兩湖同郷會	團體	汽車房と壁 (敷地内の増築)	-	王枚生 (CN)	協順興	25.00	-	1500	1	二十四 番地
⑱	1933-0400	薛強初	醫師	壁 (敷地内の増築)	-	張景文 (CN)	泰和興	-	-	750	-	十九番 地
⑲	1933-0533	中国銀行 青島	金融	俱樂部と平屋と汽車 房(敷地内の増築)	-	徐垚 (CN)	新慎記	-	-	30000	-	七、八 番地
㉑	1934-0254	于墨章	金融	汽車房 (敷地内の増築)	-	樂延玠 (CN)	増記	22.20	-	300	1	十七番 地
㉒	1934-0255	趙季超	政界	住宅 (新築)	上下二戸一	張福堂 (CN)	家美营造 場	213.26	一階：客厅、居室、食堂、厨房、便所・浴室。二階：同一階。	4000	2	十八番 之二地
㉓	1935-0111	王子乾	團體 代表	住宅・付属屋 (敷地内の増築)	長屋	王錫波 (CN)	輝記	108.00	一階：居室4、厨房、便所。	1600	1	二十四 番地
㉔	1935-0112	夏廷錫	商人	住宅 (新築)	独立住宅	李岐鳴 (CN)	新慎記	147.00	一階：客厅、書斎、食堂、居室2、下房、厨房、便所・浴室。	4000	1	十七番 之三
㉕	1936-0353	于培中	商人	住宅 (新築)	上下三戸一	郭鴻文 (CN)	林記	447.20	一階：客厅、居室、厨房、便所、下房、学生室。二、三階：同一階。地下一階：物置4。	10000	3+a	十八番 之一地
㉖	1937-0003	黄季蓉	商人	住宅 (二階一部増築)	独立住宅	張景文 (CN)	泰徳湧	-	一階：不明部屋6。二階：不明部屋3、増築部は書斎。	400	2	十一番 之一地
㉗	1937-0004	石誠齋	商人	壁 (敷地内の増築)	-	朱致經 (CN)	永盛棧	-	-	150	-	二十三 番地
㉘	1937-0005	李晉陽	商人	付属屋 (敷地内の増築)	-	張遇辛 (CN)	華豐恒	40.97	一階：門房(守衛室)、花房(グリーンハウス)	700	1	十五番 地

(档案より作成。\*「寢室」、「住室」、「居室」は共に「居室」と、「書房」、「書斎」は共に「書斎」とした。)

Table2 Residents information during the period of G.R.C.

時点	氏名	国籍	住所	職場	職務	出典	時点	氏名	国籍	住所	職場	職務	出典
1930	伊藤勝治	日本	1号	日本総領事館附獣疫調査所	技手	A	1930	徳山真二郎	日本	30号	青島日本中学校	教師	A
1930	清水欽平	日本	1号	日本総領事館附獣疫調査所	技手	A	1930	江島茂吉	日本	31号	青島日本中学校	教師	A
1930	伴寿藏	日本	15号	日本総領事館附獣疫調査所	技手	A	1930	岡田瓢	日本	31号	青島日本中学校	囑託	A
1930	窪田卯之助	日本	大学路社宅	東洋拓殖青島出張所	支配人	A	1930	佐々木政男	日本	12号	青島第二日本尋常小学校	校長	A
1930	重松均	日本	大学路社宅	東洋拓殖青島出張所	社員	A	1930	中村猪之助	日本	1号	青島輸出生牛取引株式会社	支配人	A
1930	小林秀太郎	日本	4号	東洋綿花株式会社	社員	A	1930	楠目利之助	日本	1号	同仁会青島医院	事務員	A
1930	寺岡貫一	日本	4号	東洋綿花株式会社	社員	A	1930	田中晴一	日本	3号	三菱商事青島支店	社員	A
1930	田邊毅	日本	31号	青島日本中学校	教諭	A	1930	河野銀蔵	日本	6号	三菱商事青島支店	社員	A
1930	田上捨四郎	日本	30号	青島日本中学校	教諭	A	1930	松山重雄	日本	6号	三菱商事青島支店	社員	A
1930	赤峰一郎	日本	30号	青島日本中学校	教諭	A	1930	村田喜久雄	日本	5号社宅	三菱商事青島支店	社員	A
1930	八廣定	日本	31号	青島日本中学校	教諭	A	1935	楊津生	中国	20号	市政府	参事	B
1930	島川義平	日本	31号	青島日本中学校	教諭	A	1935	雷法章	中国	22号	教育局	局長	B
1930	佐藤清信	日本	29号	青島日本中学校	教諭	A	1937	婁相卿	中国	28号	海軍	司令部参謀	B
1930	那須和五郎	日本	30号	青島日本中学校	教諭	A	1937	王觀武	中国	28号	海軍	教導隊隊長	B
1930	森田善一	日本	29号	青島日本中学校	教師	A	(Aは「支那在留邦人人名録」で、Bは「現住中外重要人員一覧表」である。)						

に建てられた(②)。一方、それ以外の工事は住宅の同敷地内において、汽車房(車庫、⑭と⑳)、あるいは守衛室などの附属屋を新築するか(㉑)、壁の仕切りを加えた(⑩、⑫、⑬、㉒)工事であり、既存の住宅の機能を向上させるものであった。

部屋の構成をみると、半数以上の住宅に使用人用の部屋(下房か女僕室)、書斎が確認できるため、中流以上の知的な階層が居住者と考えられる。そして、洋式便所と浴槽付の浴室が一体化した空間も一部図面から確認出来るため、生活設備の近代化も進行していたことが分る。

住宅の開発主体はすべて中国人であり、主に商人(8件)、金融業者(5件)、海軍関係(3件)であった。山东大学教員の宋が開発主体の工事は⑥だけで、その形式は独立住宅であった。商人は概ね独立住宅を選び、海軍関係はすべて上下二戸一住宅を選ぶ傾向があった。この傾向は各自の資金力によるものだったと思われる。

これらの工事の設計者はほとんど中国人であるが、2人の外国人設計者もいた。②の設計者はフランス人で、③の設計者は日本人の小山良樹<sup>注23)</sup>である。

一方、大学路の住民層について、1930年に日本側が発行した「支那在留邦人名録」、1936年及び1937年に中国青島公安局が発行した「現住中外重要人員一覧表」<sup>注24)</sup>により大学路に在住していた住民についての情報を得ることができる(Table2)。1930年に大学路に在住していた日本人は主に青島における日本人向け教育機関の教員と大手日本企業の社員で、その中には、青島第二日本尋常小学校長佐々木政男、東洋拓殖青島出張所支配人窪田卯之助のような組織内の要職にあった人物もいた。この時期の大学路に日本人の住民は多くいたが、日本人が開発者であるケースは档案からは確認できなかった。一方、1935年と1937年には政府と海軍関係の中国人の重要人物もいた。これらの住民は名前がほとんど工事申請者と一致していないので、借家をしていた可能性が高い。

## 4-2 住宅建築の実態

### (1) 独立住宅

①はこの中では最も早く、大商人である丁敬臣により建設された延べ床面積 739.63 m<sup>2</sup>の最も大規模な独立住宅である。丁敬臣はドイツ統治時代から青島実業界の有力者であった<sup>注25)</sup>。彼の住宅(Fig. 4)は寄棟屋根の煉瓦造の三階建てで、四隅に四つの小さな寄棟屋根の塔状の部屋が作られた。ファサードは洋風で、左右対称の作りである。外壁だけでなく屋根にも窓が取り付けられている。正面入口にはキャノピーと涼台(ベランダ)が設けられている。入り口を入ってすぐにあるのが客厅(応接間、以下同)で、両側の部屋は食堂と書斎であった。背後の廊下に二、三階に上がる階段が設けられる。二、三階の部屋は居室(寝室、以下同)で、浴室は二階に一箇所があり、便所は各階に配置してある。Table5から見ると、丁敬臣は1944年の時点にもここに住んでいた。

新築で最も小規模の独立住宅は㉒のものである(Fig. 5)。この建物は1935年に商人の夏廷錫により建てられたものである。延べ床面積は147 m<sup>2</sup>で、新築された各種の住宅の中では最も小さかったが、中流以上の層の住宅と考えられる。建物は一階建てで、ファサードは基本的には洋風だが、垂木が外側に見える点は和風のでもある。屋根は二つの切り妻が直角に組み合わせられている。建物の平面

構成は中廊下式住宅であり、建物は中廊下により表と裏の二つの空間に分割される。表の空間は正面入口から入って、まず客厅があり、両側に書房(書斎)と食堂がある。客厅に接している中廊下を介して、居室二つと浴・便室、厨房のプライベートな裏の空間が配置されている。厨房は使用人の部屋(下房)と裏入口に接している。小規模とはいっても、中流以上の階層の住人が生活できる設備が揃えられている。

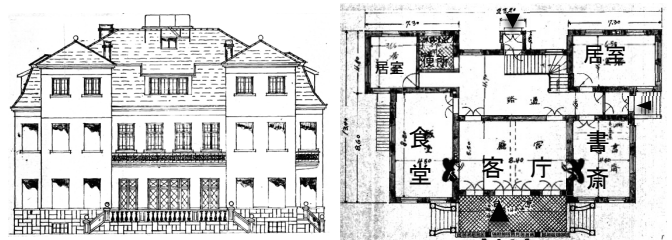


Fig.4 Elevation and ground floor plan of Ding's house

(档案「1929-0356」より、部屋名は筆者加筆)

この時期における上記以外の独立住宅の規模は①と㉒の間にある。使用人の部屋だけが設けられる独立住宅は8件の中に⑥の1件があり、書斎だけが設けられる独立住宅は8件の中に④及び㉓の2件ある。両方が設けられる独立住宅は8件の中に4件(①、⑪、⑬、㉔)ある。したがって、これらを中流以上の知的な階層との住宅であったとみて良い。

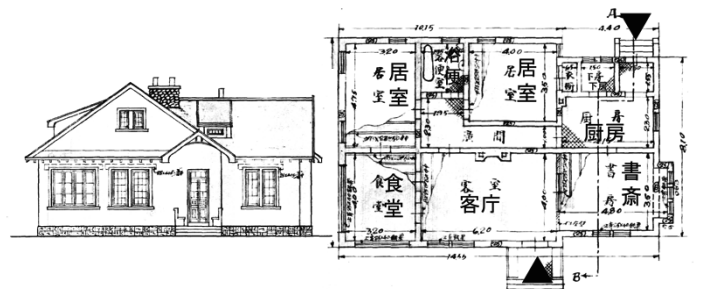


Fig.5 Elevation and ground floor plan of Xia's house

(档案「1935-0112」より、部屋名は筆者加筆)

### (2) 上下二戸一住宅

上下二戸一住宅に関しては、同時期の1931年に黄縣路と大学路の交差点近くに位置した三つの連続した敷地に一棟ずつ(Table1の③、⑤、⑨)建てられた。档案によると、建物の開発者は同じ「婁」という苗字を持ち、同じ山東平陰県出身で、しかも同じく海軍関係の人であった。したがって、この3人は同族・兄弟などのかなり親しい関係にあったと考えられる。

三棟の建物は全く違うファサードを持っていた(Fig. 6)。③は先述の小山良樹により設計され、立面の一部は半八角形に突出している。⑤と⑨は中国人の設計で、⑤はシンプルな立面を持ち、⑨はより豪華な装飾が使われていて、タワー状の部分も設けられた。しかし、この三棟の平面構成はほぼ同じような性格を持っている。⑨の上下二戸一住宅(Fig. 7)は、一世帯が独立して利用できる客厅、居室、食堂などの空間及び厨房とトイレなどの建築設備を一階・二階に備えているが、一階と二階それぞれへのアクセスは違う場所に設



けられている。③と⑨の一階には一階の住民専用の入口が建物の正面に設けられ、二階への入り口は建物の脇に設けられ、専用の階段室を上がるようになっており、一階の方がより重要に扱われていると考えられる。このような形式は、オーナーが一階に住み、二階を賃貸にすることができるため、採用されたと考えられる。例えば、1937年に施主の妻相卿と同じ海軍に務めていた王観武は同じ住所であるので、王は妻から2階を借りていたと推定される。



Fig.6 Elevations of ③、⑤、⑨  
(档案「1931-0511」、「1931-0520」、「1931-0540」より)

その他の上下二戸一住宅も档案によると Fig. 7 と同じ建築の形式を持ち、恐らく同じ住み方をしていたと考えられる。このように、上下二戸一の形式は単に建設費を抑えて二世帯分の住宅を作るだけでなく、賃貸収入により建設費を回収しつつ、各階に独立した建築設備を備えると共に、美しい外観を有する居住環境が確保出来たという点で全ての需要に応えたのであろう。

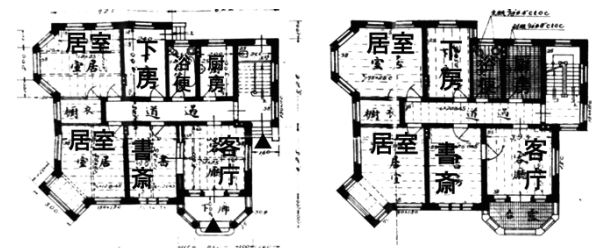


Fig.7 Ground floor and second floor plan of Lou's house  
(档案「1931-0540」より、部屋名は筆者加筆)

(3) 社宅

档案「1933-0301」及び「1933-0533」(Table1 の⑮と⑰)は中国銀行青島支店行員宿舍「広廈堂」の建設計画(Fig. 8)も記載している。これは1933年に中国銀行青島支店が在青島行員の生活状況を改善するために建てたものである<sup>注26)</sup>。現在でいうゲートッドコミュニティのような配置で、周辺を塀で囲まれ、大学路側に正門を開いていた。住宅の「TYPE」(史料原本記載、以下同)は「TYPE A」の「経理」(支店長級の役職)のための独立住宅1棟、「TYPE B」の「協理」(副支店長級の役職)の独立住宅2棟、「TYPE D」の行員宿舍のための世帯用と単身用それぞれ6戸からなる集合住宅7棟の合計3タイプ(Table3)で構成された。娯楽に供するため、「TYPE C」の倶楽部とテニスコートも用意されている。このほか、至るところに花壇、植木、芝生、噴水、道路舗装などによる緑環境・景観美化も見られる。

一方、1938年博文堂が発行した「最新青島市街一覽図」は、大学

路と魚山路の角に東洋拓殖社宅の敷地(Fig. 1)が存在したことも明記されている。北洋・国民政府時代に日本人の居住用の社宅も存在していたことがわかる。現地調査によるとこれらの建物は現存しており、その外観(Photo2)とTable2の記載のように同社の社員が居住していたことを併せると、集合住宅形式で建設された可能性が高い<sup>注27)</sup>。

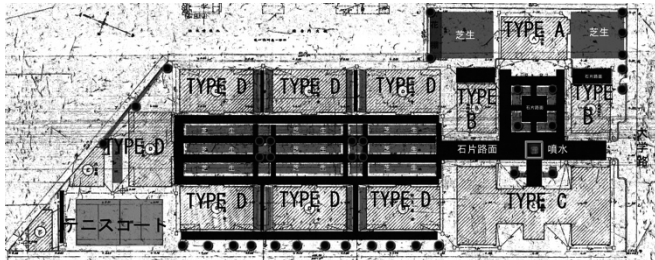


Fig.8 Master plan of residential quarters of employees of the Bank of China Qingdao Branch (1933)  
(档案「1933-0301」に筆者加筆)

Table3 Information of every type of buildings in Guangshatang

TYPE	対象	階数	戸数	一戸の部屋
TYPE A	経理	2+屋根裏	1	一階部屋：書斎、僕役室、便所2、厨房、給食室、会見室。二階部屋：居室2、浴室・便所。屋根裏：居室2、浴室・便所。
TYPE B	協理	2+屋根裏	1	一階部屋：食堂、給食室、会見室、厨房、清潔室、僕役室。二階部屋：居室3、浴室・便所。屋根裏：居室2、物置。
TYPE D	行員	3+屋根裏	世帯用6+単身用6	一階から三階の世帯：居室2、浴室・便所、会見室、厨房。屋根裏：単身用一室住居(浴場・便所は共用で屋根裏にある)。

(档案「1933-0301」より筆者作成)



Photo2 Photos of buildings in range of Toyotakushoku Company Houses(2019.9 by the author) <sup>注28)</sup>

以上のように、この時代の大学路における住宅建設は社会の中流以上の階層が建物の装飾や緑地などの景観美化などにより、できる限り独立して心地良く生活できる前提で作られたと考えられる。したがって、独立住宅と上下二戸一住宅が多く建てられ、附属屋の増築も行われた。このうち、上下二戸一住宅は大学路だけでなく、ここ以外の場所に存在することも確認できる<sup>注29)</sup>。大学路ひいては青島の住宅の中でも特徴的な住宅の一つとすることができよう。

5. 第二次日本占領時期(1938~1945)

5-1 档案から見た住宅建設の実態と住民層

1937年7月に日中戦争が全面的に勃発し、国民政府や山東大学は

青島から撤退した。翌年1月に日本軍は青島を再び占領し、国立山東大学の校舎を初めて壁で囲み、兵営にした。日本軍による政府機関が設立され、第二次日本占領時期（1938～1945年）が始まった<sup>注30)</sup>。

Table4 に示したようにこの時期の档案は㉔～㉚の15件<sup>注31)</sup>がある。海に近い良い立地は先に開発されていたため、この時期の新築建物は前時期の建物の敷地内か、さらに内陸側の敷地に位置している（Fig.1）。

開発主体はすべて中国人であり、主に一般商人（10件）であった。大学路の既存建物の所有権が変わったことが確認出来るのは4件である（㉓→㉔、㉕→㉖、㉗→㉘、㉙→㉚）。この理由は社会上流階層である政府、大学、軍隊関係の人々が戦争で青島から撤退し、元の不動産を政治的な立場の強くない一般商人に売ったためではないかと推測できる。このほか、㉙のように青島特別市公署が旧官衙施設を修理し、東文書院の校舎として利用した記録もある。これらの工事の設計者は中国人であった。

この時期の工事として特徴的なのは塀の仕切りの追加（㉔）及び敷地内平家の増築（㉕、㉖、㉗、㉘）が合計5件もあることである。既存の住宅を改善する行為が増えていたことを示している。また、個人が開発した社宅ではない集合住宅（㉚）が現れると共に、分棟型独立住宅（㉙）と複合的住宅（㉓と㉚）も出現した。複合的住宅は独立住宅か上下二戸一住宅の性格を持ちながら、厨房のような重要な生活設備だけは全棟共用になる集合住宅的な住宅である。これらの工事には一つの敷地により多くの住民を収容しようとする傾向が見られる。

Table5 Residents information in Daxue Road during the Second Japanese Occupation

時点	氏名	国籍	住所	共同体	職場	職務
1944	丁敬臣	中国	16号	第一甲	丁敬記	総経理
1944	王斌卿	中国	18号	〃	福豊泰	総経理
1944	項栄科	中国	20号	〃	武下房産公司	使用人
1944	項栄田	中国	14号	〃	吉田水産組合	使用人
1944	範開祈	中国	14号	〃	海軍司令部	使用人
1944	張樹有	中国	14号	〃	海軍司令部通信班	使用人
1944	冷延聖	中国	14号	〃	海軍司令部	使用人
1944	林典璋	中国	5号	〃	海軍司令部	使用人
1944	張樹誠	中国	5号	〃	海軍司令部	使用人
1944	秦好友	中国	14号	〃	海軍司令部	使用人
1944	鄭俊卿	中国	26号	第二甲	紅卍会	庶務主任
1944	何紹武	中国	26号	〃	裕大號	経理
1944	丁傑臣	中国	26号	〃	紅卍会	救済隊員
1944	葛敬應	中国	32号	〃	元記商行	経理
1944	李煥章	中国	32号	〃	無	無職
1944	秦文燦	中国	33号	〃	濰縣育秀工廠	職員
1944	殷啓唐	中国	33号	〃	寶隆洋行	職員
1944	朱正瑞	中国	34号	〃	慎法商行	司帳員
1944	任孜修	中国	34号	〃	紅卍会	会員
1944	楊仲書	中国	34号	〃	觀象路小学	教員
1944	王覚庸	中国	34号	第三甲	私立三江小学	事務主任
1944	李長庚	中国	34号	〃	裕生仁	店員
1944	尉書銘	中国	34号	〃	廣源号	店員
1944	卞乃峙	中国	34号	〃	大阜銀行	行員
1944	楊祖基	中国	38号	〃	市政府	収納股長
1944	孫祖蔭	中国	38号	〃	膠海関	職員
1944	劉和齋	中国	38号	〃	山東路中西靴店	経理
1944	時福林	中国	38号	〃	上海路祥大藥房	経理
1944	龐益可	中国	38号	〃	商品檢驗局	課員
1944	葉時淑梅	中国	38号	〃	葉又新の妻	無職

（参考文献19）の原本記載より）

Table4 Information read from "Urban Construction Archives" ㉔～㉚

No.	档案番号	申請者	職業	工事内容 (新增改築・修理)	住宅類型	設計者	營造会社	延べ床面積 (㎡)	部屋の構成*	建築費 (圓)	階数	建築場所
㉔	1940-0005	任永業	商人	壁 (敷地内の増築)	—	趙遵聖 (CN)	新亞建築行	—	—	2500	—	十六番地
㉕	1940-0533	特別市公署	政府	校舎 (敷地内建物の修理)	—	—	復盛興營造廠	—	—	18034	—	老衙門
㉖	1941-0122	王心純	商人	住宅 (新築)	上下二戸一	王屏藩 (CN)	德順墟	749.38	一階：客厅、居室3、食堂、厨房、物置、便所・浴室。二階：同一階。	55000	2	二十一番地
㉗	1941-0182	任永業	商人	付属屋 (敷地内の増築)	—	王屏藩 (CN)	德順墟	82.33	一階：下房及び物置	7000	1	十六番地
㉘	1941-0212	王心純	商人	住宅 (新築)	集合住宅	王屏藩 (CN)	德順墟	419.62	一階：客厅2、居室2、食堂2、厨房2、便所・浴室2。二階：同一階。	38000	2	二十一番地
㉙	1941-0255	殷啟堂	商人	住宅 (新築)	複合的住宅	陳良培 (CN)	建豐營造廠	239.59	一階：客室、居室2、食堂、厨房、便所・浴室。二階：客室、居室3、書斎、便所・浴室。屋根裏：客室、居室3、書斎、便所・浴室。	30000	2+ b	十五番地
㉚	1941-0349	任永業	商人	付属屋 (敷地内の増築)	—	王屏藩 (CN)	德順墟	101.34	一階：下房2、汽車房（車庫）	7000	1	十六番地
㉛	1941-0350	楊煥章	商人	付属屋 (敷地内の増築)	—	陳良培 (CN)	建豐營造廠	26.68	一階：花屋（グリーンハウス）	1500	1	十五番地
㉜	1941-0376	王心純	商人	付属屋 (敷地内の増築)	—	王屏藩 (CN)	德順墟	65.00	一階：下房3	5000	1	二十一番地
㉝	1941-0391	王心純	商人	住宅 (新築)	独立住宅	趙遵聖 (CN)	新亞建築行	376.90	一階：客厅、居室3、厨房、下房、便所・浴室。二階：居室6、下房。	30000	2	二十一番地
㉞	1941-0400	王李令葵	不明	住宅 (新築)	上下二戸一	建業工務所	林記	378.62	一階：客厅、居室、食堂、厨房、女僕室、便所・浴室。二階：客厅、居室、物置、厨房、女僕室、便所・浴室。	35000	2	二十六番之二地
㉟	1942-0107	曹愚庵	商人	住宅 (新築)	分棟型独立住宅	趙庭禎 (CN)	光華營造廠	542.00	一階：客厅、書斎、居室3、浴室、厨房、食堂、便所。二階：居室10、浴室。	60000	2	二十六番之一地
㊱	1943-0111	張一仁	不明	(所有者変更)	—	—	—	—	—	—	2	十三番地
㊲	1943-0112	陳際雲	不明	(所有者変更)	—	—	—	—	—	—	2	十四番地
㊳	1944-0064	馬香亭	不明	住宅 (独立から複合型に増改築)	複合的住宅	蓋駿聲 (CN)	—	457.10	一階：客厅、客室、書斎、食堂、厨房、下房、居室、花室、便所。二階：客厅、居室3、浴室、食堂。三階：居室4、客厅、便所。	37000	3	十一番之二地

（档案より作成。\*同Table1）



これらの档案の中で、4件は王心純という商人が大学路二十一番地で住宅を新築したものである(③⑩、③②、③⑥、③⑦)。王心純という人物の詳しい情報はないが、平屋、集合住宅、上下二戸一、独立住宅を一棟ずつ建てており、かなりの資金力があつたと推定される。

一方、1944年に青島市市南区が発行した「大学路聯保第五保店舗及び住民調査票」<sup>注32)</sup>に基づいて中国人住民の住所、職場及び職務をTable5にまとめた。Table5によると、職務が使用人、店員、職員などの人々が統計された人数の半分以上を占めている。外国人についての状況は不明であるが、大学路の住民層はこの時期に社会の中下流階層が増えていたのではないかと考えられる。そして、同じ住所に二世帯以上の全く職場が無関係な人が住んでいたケースもあるので、大学路の住宅は新しく集合住宅が作られたかもしくは既存の住宅が雑院化<sup>注33)</sup>されていたと推測される。

## 5-2 住宅建築の実態

### (1) 集合住宅

以下でもいくつか具体的な例を示しつつ、この時期の建設活動を紹介していく。まず、Table4の③②(Fig.9)は大学路における初めての個人開発の集合住宅である。1941年に商人の王心純により建てられたこの建物は2階建ての寄棟の屋根を持ち、ファサードがシンプルな左右対称のものである。建物の平面構成は各階に2世帯が住めるように部屋と建築設備が配置されている。中廊下も中央にドアが設けられており、閉鎖可能となっていた。建物左右の脇に入り口が設けられ、入ってすぐのところに階段室があり、ここに一階住居のドアと二階への階段がある。各世帯は客厅、住室、浴室・便所、厨房、食堂が一セット揃えられており、独立した生活が営めるようにしてある。

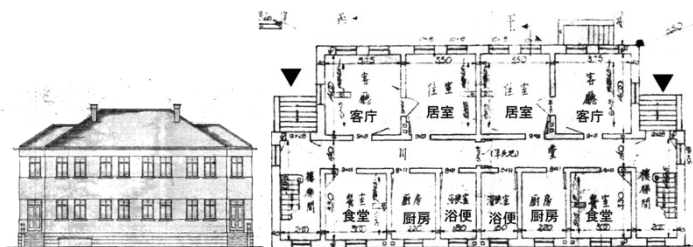


Fig.9 Elevation and ground floor plan of ③②

(档案「1941-0212」より、部屋名は筆者加筆)

### (2) 分棟型独立住宅

③⑨のように分棟型独立住宅もあった(Fig.10)。1942年に商人の曹愚庵により建設されたこの住宅は、大学路側の二階建ての独立住宅と背後の片廊下式の二階長屋から構成され、その間を廊下が繋いでいる。表の部分は一階に書斎、客厅、浴室があり、二階の部屋は一部が浴室であるほかすべて居室である。書斎があることは主人が知的な階層に属することを示し、浴室があるのは近代的な生活に対応したと考えられる。そして、背後の長屋の部分は一階に一室住居二部屋、食堂、厨房、便所があり、二階の部屋はすべて一室住居で、廊下の突き当たりには小さな便所がある。唯一の厨房は長屋部分にある。おそらく背後の長屋は使用人が主として使用する空間であつたと考えられる。このような構成は独立住宅の一種ではあるが、所有

者が表に住み、大人数の使用人が裏に住むことを前提としたタイプであり、より上流階層のための住宅が生まれていたとみることができる。

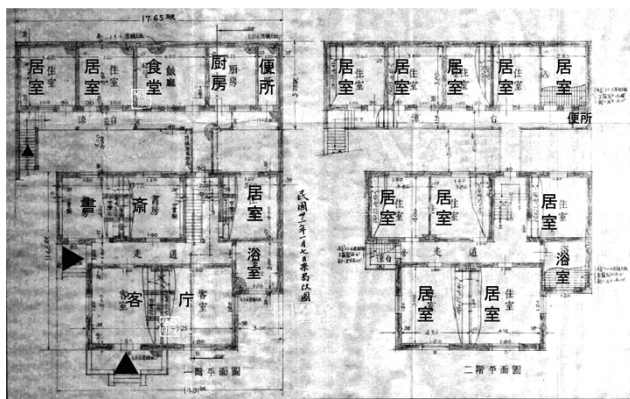


Fig.10 Ground floor and second floor plan of ③⑨

(档案「1942-0107」より、部屋名は筆者加筆)

### (3) 複合的住宅

また、③③は商人である殷啓堂が建てた二階建ての屋根裏部屋付きの住宅だが、食堂と厨房は一階だけに配置されている。そして、客厅と便所併設浴室は各階に配置されてある。一階の居室は二部屋で行き来ができるようになっており、二階と屋根裏の居室はすべて個室で、書斎は二階と三階に一部屋ずつ配置される。これらの応接、書斎、衛生の建築設備は一つの独立住宅にしては少し多いと考えられる一方、厨房と書斎の数は上下三戸一にしては不足している。しかも、建物の主要入り口が一箇所だけになり、平面は中廊下式で、二、三階の住民が共用の階段で接触するため、各階は完全に独立した空間になっていない。したがって、この建物は独立住宅・上下三戸一・集合住宅の性格を併せ持つ複合的住宅である。一方、档案「1944-0064」によると、④②は既存の独立住宅を三階の増築により複合的住宅にしたことが確認できる。

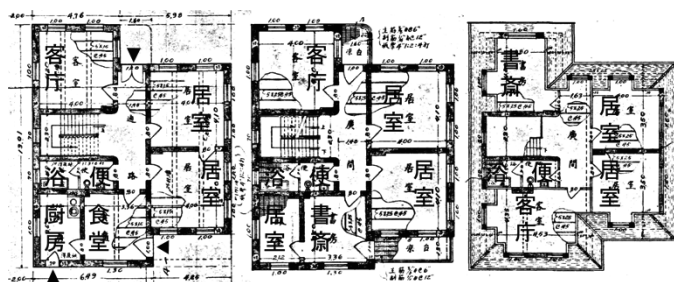


Fig.11 Ground floor, second floor and roof floor plan of ③③

(档案「1941-0255」より、部屋名は筆者加筆)

以上のように、この時代の住宅建設は前の時期ほど活発ではないが、日本が統治したという時代背景にもかかわらず、中国人が大学路の開発を担っていた。一般商人は住宅の集合住宅化を進め、相対的に下流の層にも賃貸しようとしたと考えられる

この後、1945年に第二次日本統治は終了するが、1949年に中華人民共和国が成立するまでの間に、新しい建設は見られなかった。



档案⑬～⑯はどれも不動産証明書の再発行であった。近代の大学路における住宅建設活動はここまでで終了となったと推定される。

## 6. おわりに

大学路における近代郊外住宅の建設活動は日本統治時期の教育機関の設立がきっかけになり、最初に教育機関関係者専用の住宅が建設された。その後、民国時代期の教育機関の拡大や昇格に伴い、文化的な空間のイメージが強くなり、社会の上流階層がこの地区の魅力を感じて集まってきたと推測される。そして、住宅は独立住宅と上下二戸一住宅が主たるタイプとなった。このうち上下二戸一住宅は、今までの研究ではあまり言及されていない。しかし、優れた居住環境と建設収支のバランスの良い解決案という点で合理的であり、青島の特徴的な住宅形式となったと言えるであろう。これらの住宅建築活動は、開発及び設計の面から見ると他都市の租界内の街区では外国人の勢力が特に建設初期には強かったのに対し<sup>注 34)</sup>、青島の大学路では、一貫して中国人が中心的立場を担ったという特徴もある。

後に日中戦争の間に、教育機関は撤退したが、大学路は一般人に変わらず憧れられ、受け継がれたと推定される。この時期には様々な集合住宅化した住宅が建設された結果、より幅広い階層の人々が容易に住める空間に変容した。これらの多様な住宅は現代の大学路一帯の骨格を構成しており、青島の文化的な象徴になっている。

ただし、大学路の住宅類型は近代青島で確認される全ての類型ではない。前稿<sup>注 35)</sup>で述べた通り、大鮑島地区、青島駅西側地区、市場路・小鮑島地区を対象に検討した範囲では、近代青島の中流階層の集合住宅には里院<sup>注 36)</sup>、長屋型、小庭付き長屋型（上海の里弄に近いもの）があったが、大学路にこれらの建物がないということは地区の一つの特徴のようにもみえる。おそらく大学路では最初に相対的に上流階層の人々の居住地となり、その後の開発者が原則的に元の形式の基本を守ろうとしながら、より広い住民層を受容したからであろう。

今後は中下流階層の人々の住宅について検討を加えることしたい。このことによって近代青島における社会の各階層による郊外住宅の建設実態及び住宅形式の系譜を明らかにする予定である。

## 参考文献

- 1) Pei, G.: Study on Qingdao Badaguan Historical and Cultural District, Ocean University of China Press, 2012 (in Chinese)  
裴根: 青島八大関歴史文化街区研究, 中国海洋大学出版社, 2012
- 2) Chen, L.: Study on the Qingdao Architecture of German Occupied Period, Doctoral thesis of Tianjin University, 2006 (in Chinese)  
陳震: 徳租時期青島建築研究, 天津大学博士論文, 2006
- 3) Warner, T.: Urban Planning and Construction of Modern Qingdao, Southeast University Press, 2011 (in Chinese)  
トルステン・ワーナー 著, 青島市档案馆 訳: 近代青島の城市规划と建設, 東南大学出版社, 2011
- 4) Guo, J.: Study on the Spatial Composition of Qingdao Liyuan, Master's thesis of Beijing University of Civil Engineering and Architecture, 2014 (in Chinese)  
郭婧: 青島里院建築空間構成的研究, 北京建築大学修士論文, 2014
- 5) Jin, S.: Modern Urban Architecture in Qingdao 1922-1937, Tongji University Press, 2016 (in Chinese)  
金山: 青島近代城市建築 1922-1937, 同済大学出版社, 2016
- 6) Jiao'ao Commercial Port Bureau: Compilation of Current Laws and Regulations of Jiao'ao Commercial Port, 1926 (in Chinese)  
膠澳商埠局: 膠澳商埠現行法令彙纂, 1926

- 7) Qingdao City Government: Municipal Laws and Regulations of Qingdao City (Vol.5 Works), 1936 (in Chinese)  
青島市政府: 青島市市政法規彙編 (第五編 工務), 1936
- 8) Qingdao City Archives: Qingdao Tongjian, Chinese Literature and History Press, 2010 (in Chinese)  
青島市档案馆: 青島通鑑, 中国文史出版社, 2010
- 9) the Land Office: Map of TSINGTAU, 1914 (in German)  
土地局: 青島市街地図, 1914
- 10) Rikugunsho: Chintaogunseishi (Qingdao Military and Political History: From Nov. Taisho 3 to Sept. Taisho 6), Vol.5, 1927 (in Japanese)  
陸軍省: 青島軍政史・自大正 3 年 11 月至大正 6 年 9 月, 第五卷, 1927
- 11) JACAR Ref.B07090772100, Chintaoshigaikoujikeikakuzu (Masterplan of constructions on Street of Qingdao), One Case of Shandong Occupied Territory Disposal / Detailed Agreement / Public Property Issues References Volume 1, n.d. (in Japanese)  
JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090772100, 青島市街工事計画図, 山東占領地処分一件/細目協定関係/公有財産問題 参考資料 第一巻 (外務省外交資料館), 発行年月記載なし
- 12) Shubugunminseisho: Chintaochiban-ichiranzu (Qingdao Lot Number Map), early 1920's (in Japanese)  
守備軍民政署: 青島地番一覽図, 推定年代 1921 後半~1922
- 13) Editorial Committee of History of the Japanese Junior High School: History of the Japanese Junior High School, the Japanese Junior High School Publication Society, 1989 (in Japanese)  
青島日本中学校校史編集委員会: 青島日本中学校校史, 青島日本中学校校史刊行会, 1989
- 14) Shimatsu, C.: Shinazairyuhoujinjinmeiroku (List of Japanese People Residing in China), Kinpusha, 1930 (in Japanese)  
島津長次郎: 支那在留邦人名録, 上海金風社, 1930
- 15) Qingdao Public Security Bureau: List of Important Chinese and Foreign Personnel Currently Living in Qingdao, 1936&1937 (in Chinese)  
青島市公安局: 現住中外重要人員一覽表, 1936&1937
- 16) Ministry of Foreign Affairs of Japan: Gendaichukaminkokumanshuteikokujinmeikan (Name List of Modern Republic of China and Manchu Empire), Toadobunkai, 1937 (in Japanese)  
外務省情報部: 現代中華民国満洲帝国人名鑑, 東亜同文会, 1937
- 17) Nakanishi, T: Manshushinshirokudaisanban (Gentlemen in Manchu 3rd edition), Manmo-shiryokyokai, 1940 (in Japanese)  
中西利八: 満洲紳士録第三版, 満蒙資料協会, 1940
- 18) Hakubundo: Saishinchintaoshigaichiranzu (Latest Street Map of Qingdao), 1938 (in Japanese)  
博文堂: 最新青島市街一覽図, 1938
- 19) General Security Office of Shinan District, Qingdao: Daxue Road Joint Insurance Fifth Insurance Store and Resident Survey Ticket, 1944 (in Chinese)  
青島市市南区総聯保辦事処: 大学路聯保第五保店舗と及び住民調査票, 1944
- 20) SEI, L., Kawai, M., Nishide, S., Funo, S.: A Study on the Spatial Formation and The Extended Urban Village in The Area of Xintaicang of The Old Inner City in Beijing Vol.2・The Extended Process of Siheyuan, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting Architectural Institute of Japan, Architectural Planning and Design, pp. 1113-1114, 2016. 7 (in Japanese)  
成浩源, 川井操, 西出彩, 布野修司: 北京旧内城・新太倉歴史文化保護区の空間構成と城中村化 その 2 ~四合院の雑院化プロセス~, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1113-1114, 2016. 7
- 21) Liu, Y. and Fujikawa, M.: The Development Process of the Original British Concession in Tianjin, China, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.80, No.712, pp.1285-1294, 2015. 6 (in Japanese)  
劉一辰, 藤川昌樹: 中国天津における原英租界の開発, 日本建築学会計画系論文集, 第 80 巻, 第 712 号, pp. 1285-1294, 2015.6
- 22) Chen, Y.: The Relationship between Real Estate Investments Conducted by British Architects and Urban Development in Modern Shanghai, Journal of the Society of Architectural Historians of Japan, Vol.58, pp. 33-48, 2012. 3 (in Japanese)

- 陳雲蓮：イギリス人建築家及び組織事務所による上海での不動産経営と都市開発，建築史学，第 58 号，pp. 33-48, 2012. 3
- 23) Xu, C. and Fujikawa, M.: A Study on Types of Modern Apartment Houses in Qingdao City Based on The Analysis of Construction Works Archives, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting Architectural Institute of Japan, History and Theory of Architecture, pp. 61-62, 2018. 7 (in Japanese)
- 徐暢，藤川昌樹：「建築工事档案」からみた中国青島市における近代集合住宅の類型，日本建築学会大会学術講演梗概集，建築歴史・意匠，pp. 61-62, 2018. 7
- 24) Xu, C. and Fujikawa, M.: Construction Activities of Modern Suburban Houses in Qingdao, China: Focusing on Daxue Road during 1929 to 1937, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting Architectural Institute of Japan, History and Theory of Architecture, pp. 715-716, 2020. 7 (in Japanese)
- 徐暢，藤川昌樹：中国青島市における近代郊外住宅の建設活動に関する研究 -1929~1937 年の大学路を中心に-，日本建築学会大会学術講演梗概集，建築歴史・意匠，pp. 715-716, 2020. 7

## 注

- 注 1) 参考文献 1) p. 33
- 注 2) 参考文献 4)、5)
- 注 3) 参考文献 2)
- 注 4) 参考文献 3)
- 注 5) 参考文献 4)
- 注 6) 参考文献 1)
- 注 7) 参考文献 5)
- 注 8) 略称「城建档案」。なお、前稿では「建築工事档案」としていたが、城市建設档案馆での通称に従い、変更した。史料が継続して作られたのは各時代の建築法規により家屋工事に際して類似の要求があったからである。参考文献 10) (p. 456, pp. 467-469) によると、ドイツ時期には家屋の設計図と配置図、第一次日本統治時期には出願書（出願者、敷地、建物に関する基本情報）・配置図・各階平面図・立体面・断面図・工事仕様書概要が求められた。中華民国北洋政府時期には参考文献 6) (p. 348) によると、政府から求められる書類は「建築説明書」・「設計図」・土地権利書類であった。中華民国国民政府時期には参考文献 7) (p. 19) によると、求められた書類は「營造請照單」・「設計図」・「工事説明書」で、該当者のみ「土地証明文件」も追加された。第二次日本統治時期の法規の原本は獲得できていないが、档案が現存していることは当時も同じような書類が求められたと考えられる。
- 当該史料の公開に関しては、住宅に関わる档案は一般的に所有者が身分証明書と不動産所有権証明を提示した上で、自分の不動産に関する档案だけを閲覧することが可能である。ただし、学術目的で、中国国内の大学の紹介状の提示及び利用誓約書を提出し、許可をもらえたら、中国人民共和国成立以前の歴史的建築物に関する档案は部分的に獲得が可能である。
- 注 9) 本稿で取り上げる大学路一帯にあたる档案は番地が档案に大学路になっているもの及び現存の建物の住所が大学路に所属するものである。請求番号は Table1 及び Table4 の「档案番号」と同じである。
- 注 10) 参考文献 8) p. 75
- 注 11) 参考文献 8) p. 86
- 注 12) 参考文献 9)、本図は王棟氏提供によるものである。記して、同氏に謝意を表する。
- 注 13) 参考文献 8) p. 155
- 注 14) 参考文献 10) p. 455
- 注 15) 地図に書かれている青島中学校は 1921 年 6 月に落成し、地図発行者の守備軍民政署は 1922 年末まで存在していたためである。
- 注 16) 参考文献 11)、「青島市街工事計画図」の内容は 1915~1916 年と推定される。
- 注 17) 参考文献 13) p. 7
- 注 18) 参考文献 12)、本図も王棟氏提供による。
- 注 19) 参考文献 13) pp. 648-660
- 注 20) 建物に関する図面史料がないため、現地の写真で外観だけを示す。
- 注 21) 参考文献 8) p. 186
- 注 22) 参考文献 8) p. 209
- 注 23) 小山良樹は、明治三十年に宮城県生まれ、大正五年南満工業建築科卒。

- 山東鐵道管理部工務課、土木建築請負業公司公和興工程局等に歴勤後青島にて土木建築設計監督請負業小山工程局を自営。次で現職（福昌公司（株）建築部次長）に就く」。参考文献 17) p. 302
- 注 24) 参考文献 15)、青島市档案馆に所蔵される。請求番号は A17-2-1118&A17-2-1204 である。
- 注 25) 参考文献 16) p. 400
- 注 26) 参考文献 5) p. 225
- 注 27) 大学路の档案にはこれらの情報は含まれていない。魚山路の工事として扱われていた可能性がある。この点については今後に解明していく。
- 注 28) 同注 20)
- 注 29) 上下二戸一住宅は大学路に以外に、青島では魚山路（「1930-0269」、「1931-0351」、「1931-0353」、「1931-0355」、「1931-0357」に記された建物）、陽信路（「1930-0255」及び「1934-0211」に記された建物）、熱河路（「1934-0214」に記された建物）にも存在することが確認できる。
- 注 30) 参考文献 8) p. 306
- 注 31) 新築以外で変わったケースもあるので。
- 注 32) 参考文献 19)、青島市档案馆に所蔵される。請求番号は B0038-001-00023-0239 である。
- 注 33) 北京四合院で起きた「複数の世帯が共同して居住し、増改築を繰り返す」現象は「雑院化」と呼ばれており、最近の研究に参考文献 20) がある。青島の大学路には合院式住宅はないが、第二次日本統治時期に大学路の独立住宅・複合的住宅では、複数の世帯が共同して居住するための新築・増改築が起きていたと考えられるため、同様に「雑院化」との呼称を用いた。
- 注 34) 参考文献 21) によると、天津の原英租界は英国ローヤル工兵によって計画され、道路・街区の形態が形成された。租界の開発に主導的役割を果たしたのは Detring というドイツ人であった。初期の天津原英租界においては、中国人は租界内で土地を租借できないという規定があったが、外国商人たちは洋行等の商業建築を多く建設し、そこに居住しながら、経営を行っていた。また、参考文献 22) によると、イギリス人建築家を雇用した外国商会や独立したイギリス建築組織事務所は近代上海租界で不動産ビジネスに積極的に乗り出していた。一方、JM 商会などのような不動産ディベロッパーは上海共同租界の都市開発に直接関わっていた。
- 以上から、開発及び設計の面では、天津や上海の租界内の街区では建設初期には外国人の勢力が強かったと言えるであろう。
- 注 35) 参考文献 23)
- 注 36) 里院は、二階建てと三階建ての建物が多く、敷地の周囲を建物で完全に囲み、大きい中庭を形成し、二階以上の部屋は全て中庭の外周に廻された廊下で連結するのが特徴である。道路に面する立面は洋風で、中庭と共同廊下があることは中国の伝統的な要素と言われるため、華洋折衷の近代的集合住宅と考えられる。参考文献 23)



# CONSTRUCTION ACTIVITIES AND RESIDENTS OF MODERN SUBURBAN HOUSES IN DAXUE ROAD AREA, QINGDAO, CHINA

*Chang XU*<sup>\*1</sup> and *Masaki FUJIKAWA* <sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> Graduate School of S.I.E., Univ. of Tsukuba

<sup>\*2</sup> Prof., Inst. of P.P.S., Univ. of Tsukuba, Dr.Eng.

This study aims to elucidate what types of houses were built, what development entities, and what kind of the inhabitants lived in them, mainly based on the analysis of Daxue Road in modern suburbs in Qingdao, China.

The modern city construction of Qingdao was influenced by the culture of Germany, Japan, and China from 1898 to 1949. Daxue Road located at the edge of the city center at that time, which is near the former site of a junior high school and a university campus. Many people from the upper class lived there. Various kinds of houses were built, and these houses, which are now a historic and vital tourism resource in Qingdao, have been conserved.

The historical materials mainly used in this study are from "Urban Construction Archives," which include architectural application forms, specifications, and design blueprints from 1929 to 1948 and the cadastral maps which were issued by different governing governments. Besides, "List of Japanese People Residing in China," published in 1931, "List of Important Chinese and Foreign Personnel Currently Living in Qingdao" issued by Qingdao Public Security Bureau in 1936, is used to analyze the inhabitants.

It is deduced that housing construction activities on Daxue Road began at the end of the First Japanese Reign Period (1914-1922). Due to the establishment of Qingdao Japan Junior High School, a housing complex was built on Daxue Road, and the residents were thought to be its Japanese teachers and employees mainly.

Although Private Qingdao University was established during the period of the Beiyang Government of China (1922-1929), the most active housing construction might begin around the establishment of National Qingdao University, later Shandong University, during the period of the National Government (1929-1937). Prominent businessmen, naval and educational personnel built independent houses, and duplex houses where two different families lived on different floors. These two kinds of houses resided by the upper-class Chinese.

During second Japan's WWII occupation of Qingdao (1938-1945), the National Government and Shandong University withdrew from Qingdao. Much of the ownership of existing buildings on Daxue Road changed. During this period, construction was mainly about building attached walls or building bungalows, and there were some newly built apartment houses made by average businessmen. The inhabitants changed to the middle class.

The construction activities of modern suburban houses in Qingdao was triggered by the establishment of educational institutions. The principal houses changed from schoolhouses to independent houses and duplex houses, and later apartment houses were built. As a result, Daxue Road has changed from space for educators to a fascinating cultural space by upper-class, then to a more mixed and matured space since it was inherited by ordinary people. Therefore, the supply and demand relationship between developers and residents was going well. A modern framework of Daxue Road has been set up from that time.

(2020年5月6日原稿受理, 2020年12月17日採用決定)